

22. 瘡の憑物

趙与時の『賓退録』卷七に云う。

“世人は瘡が起きそうになると、他所に避けるとよいというが、巷間のデタラメな説である。しかしながらこれは唐の時代からすでにそうであった。高力士が巫州に流され、李国輔が謫命を授けた時、力士はちょうど瘡を功臣閣の下に逃れていた。杜子美の詩に‘三年猶瘡疾、一鬼銷亡せず。隔日脂髓を搜し、寒を増して雪霜を抱く。徒然たり隙地に潜むは、屢しば鮮妝するを覩づる有り。’とすればただ避けるだけではなく、またその顔を化粧していたのである。”

瘡を避けるという事は、わたしは十四、五歳の頃にやったことがある。結果は効き目がなかったので、次回からはもう避けなかった。田舎では又瘡は、疱瘡のように、人間の必ずかからねばならない病気だと考えられ、最初はいつも無理に治そうとせず、罹るがまま治るがままに放っておく。これを“開昂”（Ke-ngoang）と言う。瘡の憑物の名は“臘場四相公”で、幼時に村の廟にその塑像を見たことがある。全部で四人、並んで龕中に坐っていたが、衣冠や面貌は覚えていない。ただ一人が手に火吹き竹を持ち、一人が芭蕉扇を持っていたが、後の二人の手の中のものは忘れてしまった。付いてきた下働きの言うには、扇を持っている者は人を扇いで寒くさせ、火吹きを持っている者は一吹きで病人をにわかにな熱させると云う。俗語では一般の伝染病を臘場病ラウターと言うから、四相公もそれで名付けられたのだ。[la-ta ラーターとは汚いかめちゃくちゃなという意] 本来民間の迷信は古ければ古いほど多くなるもので、この瘡を逃れるために顔を塗るというやり方もたいてい“三代〔夏殷周〕以前”から伝わり、唐代になって始めて著録されたに過ぎない。イギリスのアンドリュー・ラング（Andrew Lang）はかつて一人の淑女が、リウマチを治す秘方はジャガイモを一個盗んで、身につけていると、たちまち治ると言うのを聞いた。彼はそこから古今中外の何首烏の類に関係する多くの例を推究して、「モリーとマンドラゴラ」（Moly and Mandragora）という論文を書き、『風俗と神話』*に収めた。迷信の源流の長さには本当に驚嘆に値する。

※初出：1926年8月16日『語絲』第92期

*Custum and Myth. 1884 Longmans, Green and Co.